

ろうとするだけの人間にストレスがたまるのは無理もありません。地球を自分の高さにもああげることはできないのです。ならば、自分から大地に降り立ってみましょう。大地のぬくもりにふれてみれば、わたしたちにもアースが必要なことが、よくよく分かるはずです。

(新潟大学)

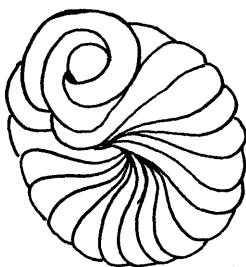
土いじり

—有田菊もみ修業に思ふ—

今井田道子

目の前の作業台の上にドカンと置かれた土の塊り。「さあも

んでごらんなさい。」促されるままにそっと手を添えたその土は、心地よく冷たく、柔らかかった。自分で作った白磁の茶碗に自分の好きな絵付けをしたい、そんな一念で遙々と有田の一陶芸作家の窯元に入れていただいた。八月の山峡の町は蒸して



いた。

土の塊りを手前に引き上げながら回転させる。片手で回し込むように押えつけ、もう一方の手で巻き上げる。手の位置を少しずつずらして同じ動作を繰返すと、菊の花びらのような形になっていく。「菊もみ」と呼ばれるのはそのためで、荒練りの後で素地の空気を抜き、粘性を増すために行なうのである。

今しがた、せんまい仕掛けの玩具のようにリズミカルに回転していた同じ土が、につちもさつちも動かない。力一杯押してみると左右に「ベタッ」と延びてしまう。あわててはみ出た土を畳み込むとクスッと笑い声が立つ。「それでは空気を入れている。」悪戦苦闘の菊もみ修業第一日目に、輶轄を使って至極薄手の茶碗を挽いて四季の野草の絵付けがしたい、という夢の途方も無さに初めて気付いた。

「そろそろ輶轄を挽いてごらんなさい。」「いえくまだく結構です。」何回言つたことだろう。私は菊もみのとりになつていて。体全体でバランスを取ればバカ力は必要ない。菊の花びらがきれいな形で浮き出して、回転しては消えていく。フッと氣を抜くと花びらの間隔が崩れてしまう。有田滯在は菊もみ三昧の日々で終った。

笠間の陶芸作家で月崇寺住職でもある松井康成氏は、日本独特の土をもむ方法である菊もみの長所は連続もみである点であると云う。いつ果てるともなく行を行なうことができる、その行といふ行いおこなが人間を作ると説く。〈注(1)〉

子どもは泥んこ遊びが大好きだ。砂場の砂でおだんご作りをしたことがない子どもは、まずいな。一つ、二つと作っては砂場の縁に置き、それをくずしては又作る。「せっかく作ったのに」とか

「そろそろ別のものでも作ってみたら」等という周りの大人の思い等伝える余地も無い程にその行為に熱中している。

「土に触れていることが楽しくて。」陶芸を楽しむ素人が、老若男女を問わず異口同音に言うことだ。備前焼の第一人者、藤原啓氏は陶芸を始めた頃のことを「はたから見れば幼稚園児の粘土細工、泥んこ遊びのごときものだったろう。だが、幼児が時のたつのも忘れて土と戯れるように、私もたちまち土のとりこになった（注②）」と回顧する。

結果ではなく行為自体が目的であるが為に土いじりは、大人も子どももとりこにしてしまうのではないか。絵付けをした白磁茶碗はまだ存在しない。しかし菊もみ三昧の有田滯在中に土いじりの醍醐味を満喫したことで、その魅力の片鱗を味わうことが許された。そんな体験は、おだんご作りに打ち興じる子どもたちと共に通の体験のように思えるのだ。いつ果てる事もなく作り続ける子どもの姿に「その行いが人間を作っている」ことを託し、とても大切にしていきたい。

(1) 松井康成『無のかたち—やきもののかたち』 講談社 昭55年 p.181～p.193

(2) 藤原啓『土のぬくもり』 日本経済新聞社 昭58年 p.4